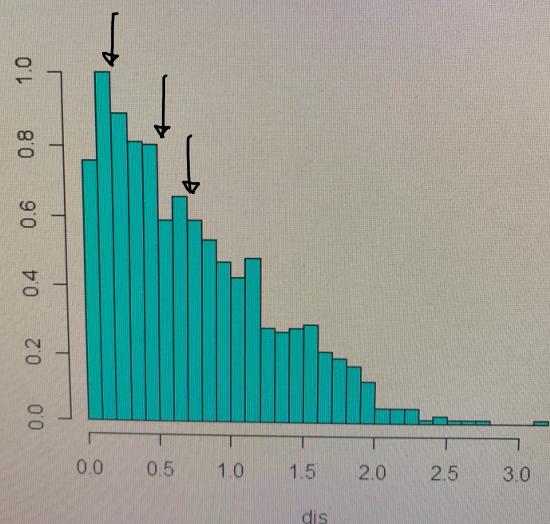


a/
10

角田氏一ト

RS

after female の
dis の distribution.



mesh の候補として、

0.2, 0.5, 0.6

がある。

→ 基本とくらべても
結果はほとんど同じ

⇒ 0.5で角田氏一トを取る。

最初の3min 分を削除

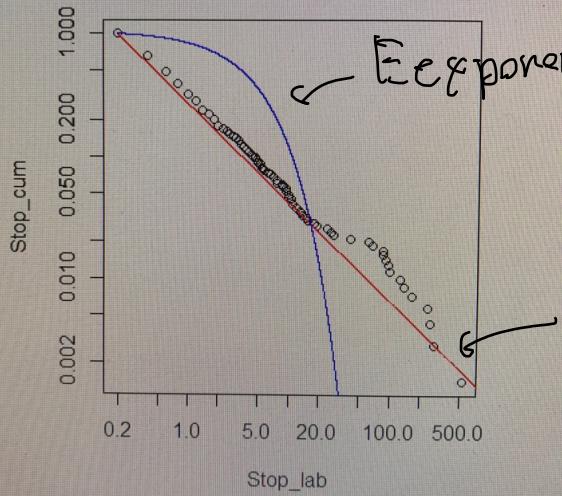
3min の間に止まっていた��間、
次の行動を出すところまでの
時間差を取る

Power law ($\mu = 1.808(86)$)

へいきに対してよりあてはまり
とめた。

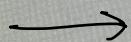
↑ dis の分布がある個体のものである。

Cumulative plot.



全個体アーリヒツ dis の分布

拡大



実際には

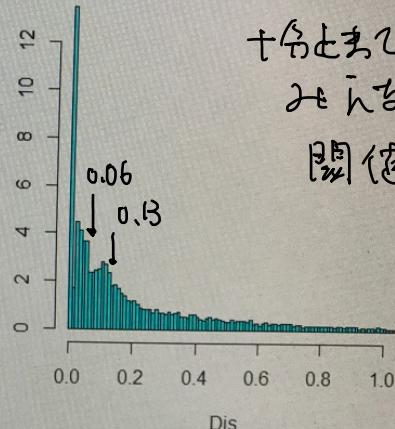
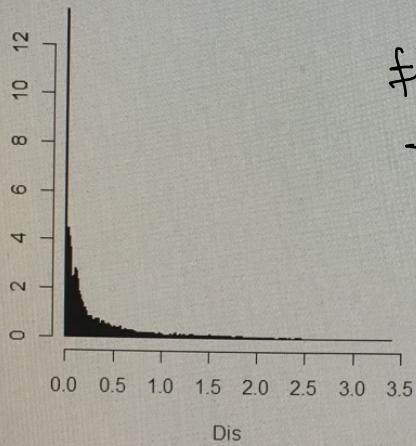
0.5 とがでも

十分と見ていいようだ。(か)

2m まで T で。

個体の distribution は 標準的

盆地である。

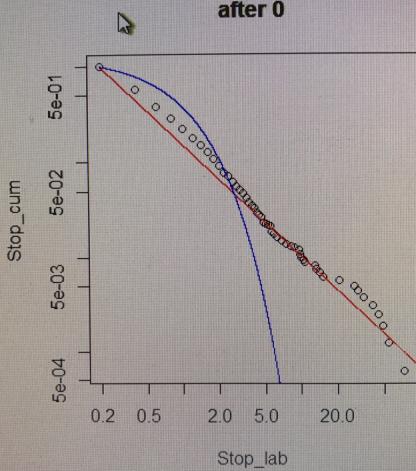


0.13 で 解析 しても、

- 結果は robust ($\mu = 2.1734$)

でも 0.06 まで いくと、0.2 の step が 増えて、

これは まだ 6m, 21m.

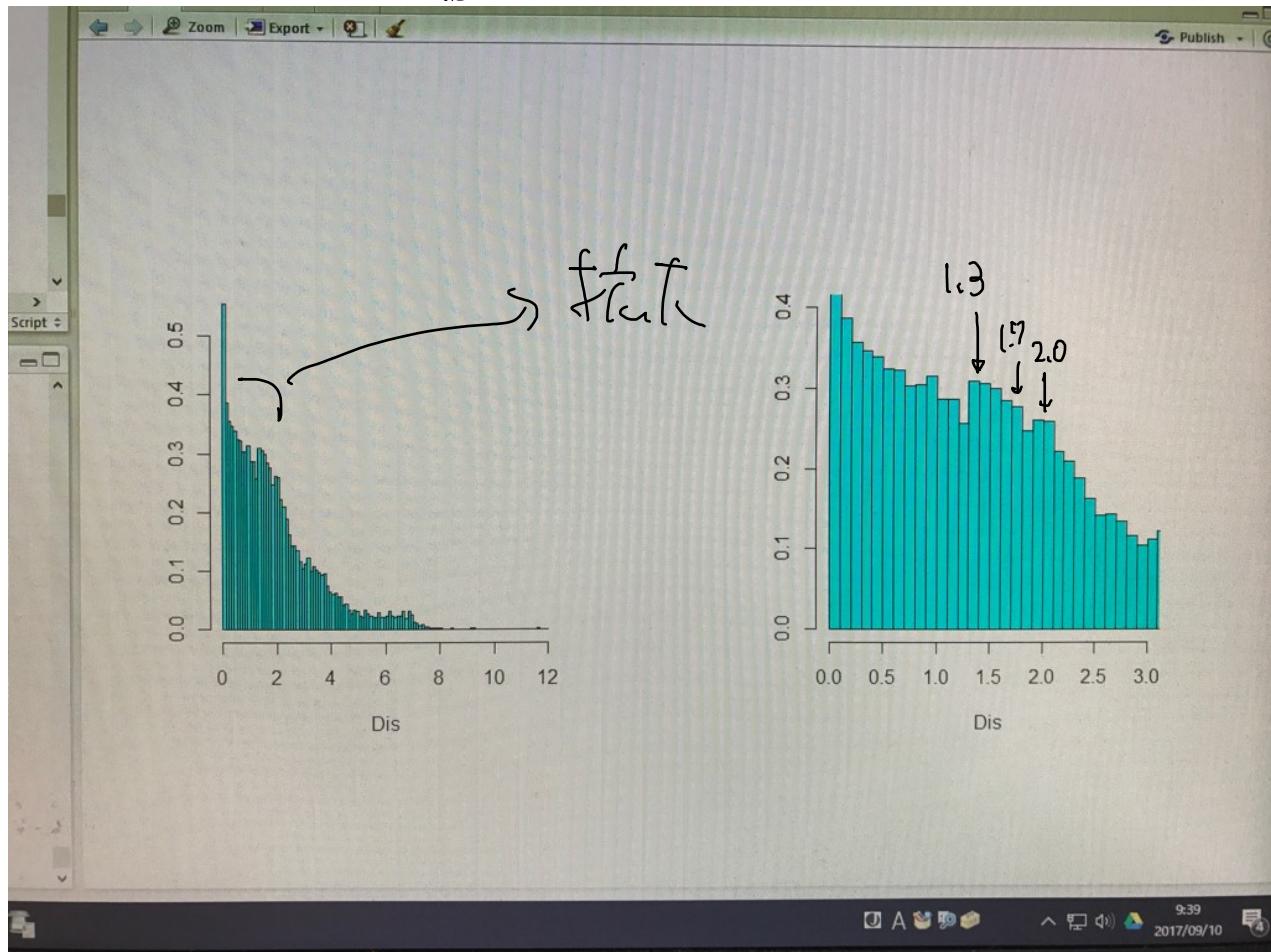


→ 軽く 2m, 同じ ことを しても よいかも しない、

or 個体のサイズから想定するのも あり。

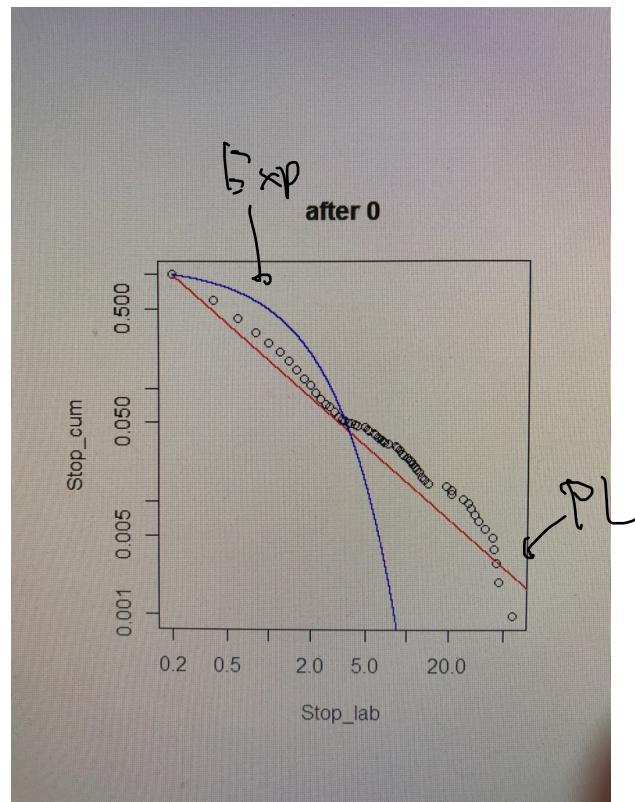
(Cf)

R_S の 同様に after female の 2 分間
と並んで $7^{\circ}-1L$



1.3 乙の解釈。

$$\mu = 2.076329.$$



Power-law や pause する個体の運動モードを角界する
ところ。

MSD 的には $\alpha < 1$ イ。

Subdiffusive [こゆる, ほのい] (横軸時間)

↑ Brownian Walk の場合

Lévy Walk や Lévy pause はまたや、ついでに

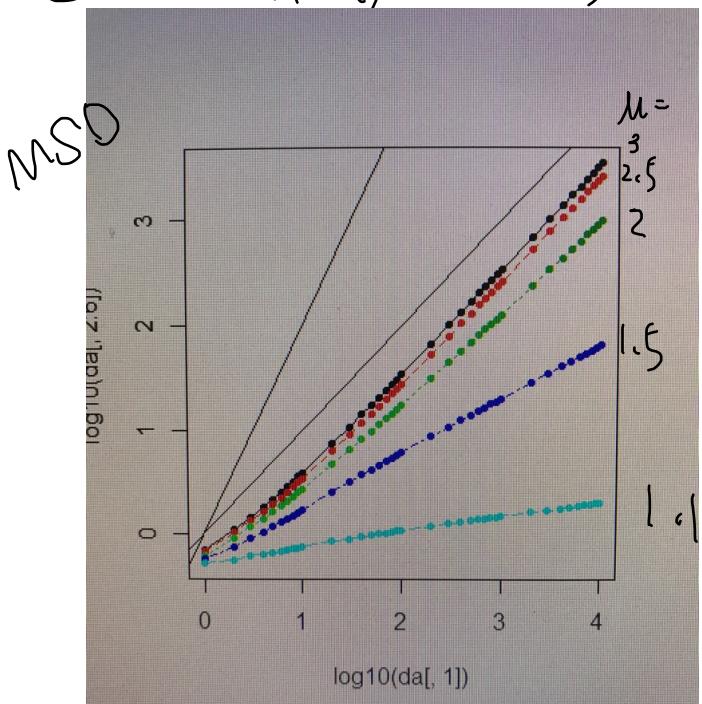
→ 才能消去して normal diffusion へ

→ 23?

Visual Studio 2017 で

⇒ C++ で MSD 計算。

BW + LP ($\mu_l = 1.1 \sim 3.0$)

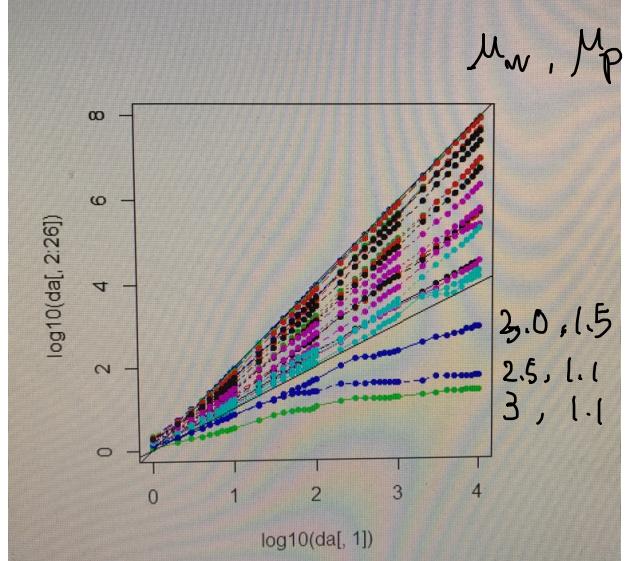


↑ ハンスケ-ルツリ-母國じ。

8集まで確認

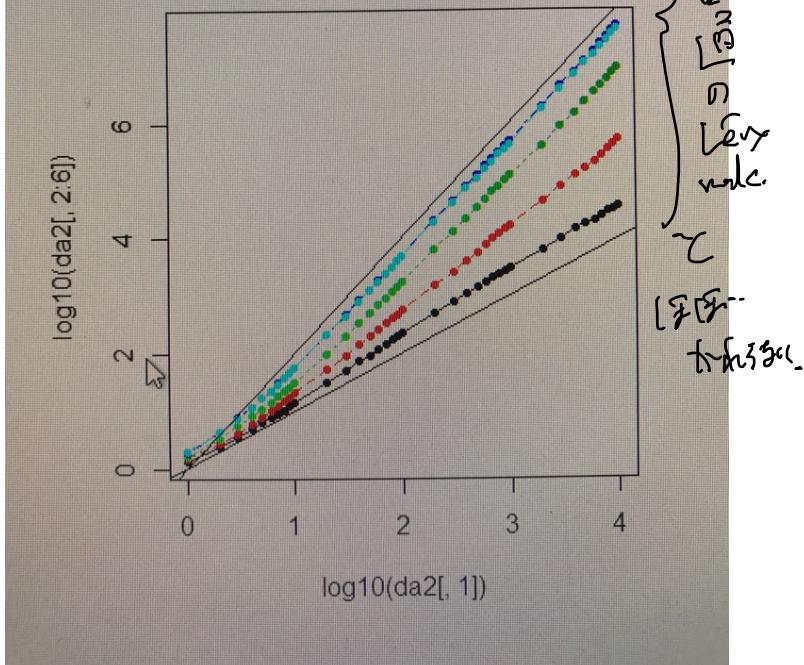
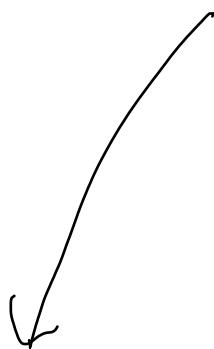
LW + LP ($\mu_p = 1.1 \sim 3.0$)

($\mu_w = 1.1 \sim 3.0$)



8集まで確認

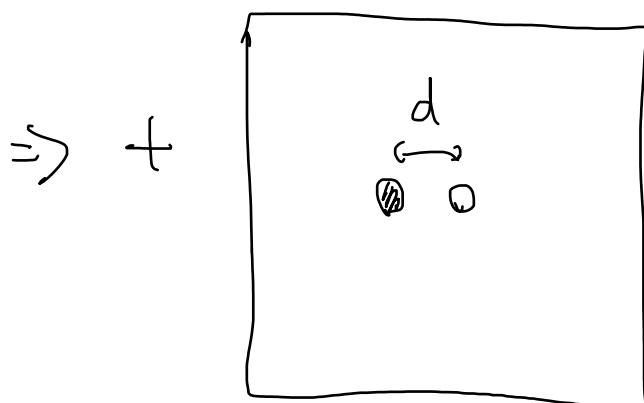
$$LW + LP (\mu_p = 3.0) \\ (\mu_w = 1.1 \ln 3.0) \approx BP$$



シロアリ側のMSD

もまた同じか壁の問題をもつ。

⇒ 目視で壁につくまでの時間を計測する。



この状況での
Lévy pauseと想定した時の
相遇率を計算する。

Simulation 作成